

## 「反省しない」アメリカ

頼りになるアメリカと信用できないアメリカ。その二面性がわかっていながらつき合うしかないのだろうか。あの国は「これが正しい」と決めたら、自らの主張を貫き通し「反省しない」ようにみえる。

2015年4月はそんなアメリカの二面性をじっくり観察する機会となった。

まずは広島・長崎の原爆を思い起こさせる話から。原爆を投下したB29戦略爆撃機「エノラ・ゲイ」の乗組員の日誌が4月末にオークションに出されたという。乗組員は「投下は大成功だった」と書き込み、その息子は「それで戦争が終わった」と誇らしげに語った。一瞬にして2カ所で20万人以上の一般の日本人を消し去った過去への「反省」はない。

同じ4月末に安倍首相が訪米、オバマ大統領と会談したが、アメリカのマスメディアは「日米首脳会談の成功は戦時中の過去をどう扱うかにかかっている」(NYタイムズ)などと批判的に書いた。そんな論調に乗せられたのだろう。アメリカの日本研究者たちが首相の戦後70年談話に注文をつける事態になっている。

大きなお世話だ。「戦時中の過去の扱い」というなら、「ヒロシマ、ナガサキは?」と反論したい。でも、彼らアメリカ人は判で押したように「戦争を終わりにしたのは原爆投下だ」と言い張る。アメリカで、現地小学校に通っていた筆者の娘は先生からそういう話を聞かされ、首をかしげていた。「そうではない」と娘に教えたのはいうまでもない。

折も折、今年はニューヨークの

国連本部でNPT(核拡散防止条約)再検討会議が開かれていた。渡米した広島、長崎両市長も反核デモに参加し、平和を訴えた。B29乗組員の話が飛び出してきたのはそんなタイミングだった。

日米同盟強化をうたいあげ、議会演説もそつなくこなした安倍首相の訪米は評価したいが、それを「謝罪が足りない」などと無神経な報道をするアメリカのメディアが気になった。

アメリカの銃規制が進まないのも「反省しない」ことのひとつ。毎年学校で銃乱射事件が起きて、幼い子どもが保護者を誤射しても、銃は事実上野放しだ。アメリカ人の多くは「自分で身を守るのは民主主義の基本」と考えるからだ。日本人には理解できない理屈だが、これを変えることはない。

オバマ大統領は安倍首相と会う前の4月半ばに、キューバのラウル・カストロ国家評議会議長と「歴史的な会談」を行った。両国首脳が会談したのは1961年の国交断絶以来初めてである。

アメリカはキューバから譲歩を引き出し国交正常化交渉で合意した、といたいところだろう。アメリカが長い間「悪の権化」だと世界に触れまわってきた仇敵キューバである。そのキューバが改心したから許してやるというわけだ。

しかし実際は、譲歩したのはアメリカのほうである。オバマ大統領は在任期間が少なくなり、外交の得点をあげる絶好のチャンス、と考えたのだろう。「(キューバに対する)孤立化政策は機能しなかった」「時代遅れの政策を終わらせたい」と言い出したのはオバマ氏のほうだった。これは世界にとっ

ても、筆者にとっても予想外だった。

国連総会は1992年から23年間「対キューバ経済制裁の解除を求める決議」を毎年採択しているが、アメリカは無視し続けた。昨年の総会では188カ国が制裁解除に賛成し、反対はアメリカとイスラエルだけだった。日本は97年から解除賛成に回っている。ここでも「反省しない」アメリカの顔がのぞく。

1982年にアメリカはキューバを「テロ支援国家」に指定したが、これについてもオバマ大統領は外す決断をした。今やテロの脅威などないのに、33年間も「悪い国、恐ろしい国」のイメージを植え付けたのはアメリカの誤りだ。

国交正常化交渉をキューバ側からみると、我慢比べで判定勝ちしたのがキューバといえる。キューバの知識人も(いや民間人も)おそらく「アメリカに勝った」と思っているはずだ。「テロ支援国家の指定」や「経済制裁」にこだわったアメリカの間違いがようやく正される。

ケネディ元大統領はいまだに根強い人気があるという。しかし、彼の時代に「ピッグス湾事件」のようなキューバ政府転覆活動があったこと、そして、その類のあらゆる試みが失敗に終わったことも忘れてはならない。

1959年にキューバ革命を成功させたフィデル・カストロ前国家評議会議長は当初は社会主義者ではなかったといわれる。カストロ氏を取り込めず、旧ソ連に追いついたのはアメリカ外交の失敗との見方もある。

アメリカがどこまで認めるか疑問だが――。

# 景気悪くてもブラジル料理は人気

ブラジルの景気低迷が続いている。2014年も今年もほぼゼロ成長だ。日本に出稼ぎに来たブラジル人の数も一時の30万人から20万人を切った。ラテンサッカーの人気も14年ワールドカップでブラジルが惨敗したせい、いまひとつパツとしない。

まるで「ブラジル離れ」が起こっているように見える。ところが不思議なことに、ブラジル料理店の人気が沸騰しているという。なぜだろう。

一般に「シュハスカリア」と呼ばれる典型的なブラジル料理店は主なものだけでおよそ170店にのぼる（食べログの掲載数）。小さな店を入れると全国に200～300店ほどあるのではないかな。

食事だけの店、サンバやボサノバなどの音楽付きの店、あるいは飲み物中心のバー、カフェなど形態はさまざまだ。

都内の有名ブラジル料理店の予約をとろうとしてもなかなかとれない。しかも店によっては「2時間の制限」がある。店側は毎晩2回転を狙うが、お客は時間が気になって仕方がない。ずいぶん強気になったものである。20年前はこんなことはなかった。

都内の最古参のひとつ、バルバコア・グリルはもともと表参道にサンパウロの支店を出し、これを“日本本店”として、順調に店を増やしている。東京では新丸ビル、渋谷、六本木、大阪では心斎橋、梅田にも進出した。店を増やすとそれがまた満杯になる。その繰り返したから店の方は笑いが止まらない。

多かれ少なかれ、ほかのレストランも同じような傾向だ。都内に

はブラッサ・オンゼ、トゥッカーノ、カリオカ、カフェ・ド・セントロ、サッシペレレ、コロombo、ラテン・クオーター、バックナーなどがあるが、いつの間にか、“シュハスコ・ブーム”は全国規模に拡大してきた。

1990年に労働ビザ取得が緩和されたのを機に出稼ぎブラジル人が増えた。浜松、名古屋、群馬、川崎、埼玉をはじめ、大阪、神戸、山梨、三重、福井、そして北海道、沖縄まで店が広がった。ブラジル料理が東京だけでなく地方都市に広がっているのは注目している。

なぜシュハスコなのか。もちろん肉料理がうまいことがひとつ。シュハスコはブラジル国内と同じように「食べ放題」が基本だ。まずサラダバーで、さまざまな種類の野菜、各種サラダ、揚げ物、チーズ、生ハムなどをたっぷりいただく。

サラダバーの種類の多さは“常識外れ”だ。小食な人は肉にたどり着く前に満腹になってしまう。最近、ファミリーレストランなどでサラダバーが充実してきたのは、ブラジル料理店の影響が大きいと思う。

そのあと本当の「食べ放題」が始まる。触れこみは牛肉バーベキューだが、まずは定番の「鶏とソーセージ」が出てくる。つけ合わせはチーズパンだ。それをつまんでいると、いよいよ牛肉の出番となる。

牛肉の大きな塊を部位別に焼き、それを大串に刺して、テーブルに回ってくる。専用ナイフを持ったウエイターが客に「これはいかが？」と聞き、塊から肉を削ぎとって皿に置く。次々に異なる部位の肉が来るが、すべてとって

はいけない。好きな部位が回って来るまでゆっくり待てばいい。決定権がお客にあるのがシュハスコのよさだ。

味付けは岩塩だけだからあっさりしていて食が進む。ダイエットにうるさい女性たちもここでは豪快に肉にかぶりついている。雰囲気はフランスやイタリア料理と違って開放的だ。人気の秘密はこの「開放的」なところにあるかもしれない。

ブラジル料理はもちろんシュハスコだけではない。牛肉に飽きたら、サラダバーに戻って「フェジョアード」をとってくることをお勧めする。黒っぽいフェジョン豆と豚肉などを煮込んだシチューで、これをカレーライスのご飯にかけて食べる。ブラジル人の国民食だ。

ブラジルの地酒カクテル「カイピリーニャ」も捨てがたい。サトウキビからつくった焼酎で、これが一番人気。最後は「クレメ・デ・マンガ」(マンゴ・クリーム)を食べれば満足度は増す。これで飲み物も入れて1人7～8千円也。

もっともこの牛肉、日本ではブラジル産でなく、多くはオーストラリア産を使っている。それでも、シュハスコとして提供されれば、お客は気にしない。

一般に料理への注目度が高まるきっかけはヤングOLにある。いわば“ステキ女子”が動く中高年女性が追随、おもむろに中高年男性たちも「何だ、何だ」と追いかける。日本人は明治時代から牛肉を食べるようになったというが、今OLがシュハスコに集まる姿を見るにつけ、時代の変化を感じる。(日本ブラジル中央協会 常務理事 和田 昌親)